様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2014～2019
課題番号：２６３０００１８

研究課題名（和文）インド石窟美術史のための調査研究－西インド古代後期～中世前期石窟寺院を中心に－

研究課題名（英文）Reserach for the history of Indian cave temples;

研究代表者
平岡　三保子（Hiraoka, Mihoko）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：００７２７９０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では古代～中世インドで重要な役割を持つ石窟寺院の造形活動に焦点を当て、石窟美術の発達史によりインド美術史を再認識するという立脚点から現地調査と資料収集を進めた。当研究代表者が過去取り組んできた前期仏教石窟に加えて後期仏教石窟、そしてヒンドゥー教やジャイナ教石窟まで調査対象を広げることで、前期窟から後期窟に窟構造が変容する過程や後期石窟に密教美術の要素が現れる過程、ヒンドゥー教寺院の建築・美術の様式を共有する様相を検分し、石窟美術史における編年作業および様式論への新たな手がかりを得ることができた。またインド人研究者との交流を深め、インドで概説書および論文集を出版し、国際セミナーを企画した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
当研究では多くのインド石窟寺院を精査することで、今後ライフワークとして石窟美術史に取り組む上で貴重な布石となる種々の仮説提示を行うことができた。またインド美術史基礎資料収集の充実を図ることもできた。その成果はインド石窟寺院基礎資料集成として出版を企画中であり、今後のインド美術史研究に資するものとなろう。インドの研究者との交流も図ってきたが、以前に比べて仏教美術への関心が高まっており、仏教美術の情報を提供する機会も増えてきた。デリーで企画中の日本におけるインド文化の受容をテーマとする国際セミナーおよびこれに関する著作も日印学術文化交流の一環として重要な役割を果たすことになろう。

研究成果の概要（英文）：Cave temples have been taking an important role in the art history of India. This research is based on the idea that the development of the Indian cave temples could cover the missing historical documents which were lost along with the ancient vanished monuments or architectures, and afford a new vision to the art history of India. In addition with my previous research on the early Buddhist cave temples, the later Buddhist caves (5-8 century), Hindu cave temples, and Jain cave temples are also examined in this research work. The process how the early Buddhist caves transformed to the later Buddhist caves, how the later Buddhist caves started to show the aspects of Vajrayana Buddhism, and how the Buddhist caves and the Hindu caves exchanged the idea can be successfully traced. And these visions lead me to some unique hypotheses to reconsider the history of India supported by my abounding documentation collected from the monuments of India.

研究分野：インド美術史

キーワード：インド美術史　仏教美術史　石窟寺院

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

インド美術史の解明にとって、石窟寺院の美術は重要な役割を担っている。古代初期から中世前期にわたり造営された石窟は倒壊や散逸により遺例の乏しい独立建築に代わる古代インドの建築史料であり、またよく保存された彫刻・絵画を建築空間本来の場所で観察することもできるからである。当研究代表者はかかる石窟美術の研究意義を踏まえ、これまでに古代インド、特に古代中期～末期の仏教石窟寺院の編年作業に取り組んできた（平岡三保子『インド仏教石窟寺院の成立と展開』日本学術振興会研究成果公開促進費による、山喜房佛書林、2009 年）。ただし古代初期、中期には造形活動の中心であった仏教石窟は、古代後期になると同時代に萌芽するヒンドゥー教寺院との関連性を示すようになる。インド美術史上、古代後期から中世前期（4 世紀～12 世紀）にかけてインド各地域において様式上、図像上に飛躍的な展開がみられるが、西インドにおいても 6 世紀、後期仏教石窟に続きヒンドゥー教石窟の造営が始められ、両者に大きな変化が訪れる。それは別個の流れではなく両者の共存や対立の動きとなり、尊像の改変や図像の貸借、様式の共有など様々な相互関連の様相として立ち現れる。そのため、仏教に限定せず時代・地域の特色として包括的な視点から石窟寺院を見直す必要性があった。

２．研究の目的

西インドを中心に分布するインド石窟寺院は、特に古代後期以降、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教諸窟が密接に関わり合いを持ちながら発達した。従来わが国では仏教石窟の美術研究が主流となっていたが、本研究は仏教石窟寺院・ヒンドゥー教石窟寺院を体系的に石窟美術史の内に位置付けるという新たな視点から調査研究を進める事を目的とした。より具体的には［1］古代後期～中世前期の西インド石窟寺院を中心に現地調査を行い、諸窟例の造形表現の特質を把握すること［2］特にエローラ石窟群の重要性に着目し、内在する諸問題の解明を通して仏教石窟およびヒンドゥー教石窟の相互関係の諸相を明らかにすること［3］これらに関連付けられる諸造形作例の比較分析から、石窟美術における編年論、様式史、仏教およびヒンドゥー教図像研究の一層の解明に努めることである。

３．研究の方法

前述研究の目的に向けて必要となる作業は、[1] 後期仏教窟の推移：アジャンターからエローラに至る造形表現の変遷を編年的に提示する。[2] エローラ内部における編年仮説：仏教窟と初期的な窟例と目されるヒンドゥー教窟の相関関係、先後関係を造形表現の分析から明確にする。[3]密教化の様相が現れる古代末期以降の仏教石窟とヒンドゥー教石窟との関わりを探る。[4] エローラ　ジャイナ教窟も視野に入れ、編年基準を探る。[5] 後期仏教石窟およびエローラ諸窟と関わりを持つ同時代の西インドのヒンドゥー教石窟を検討し以上の編年仮説に組み入れる。などのことがらである。そのために諸石窟寺院を対象としてインド現地における学術調査に基づく資料収集と検証作業を行い、建築形態、窟内荘厳の表現形式、彫像の図像学的解釈、様式史など総合的な視野から造形表現を吟味して各石窟美術の変遷に考察を加えることとする。具体的には当研究の主軸となるエローラ石窟寺院群およびこれに直接的・間接的に関連を持つ諸遺跡を対象に現地調査と研究を行う。5 年計画で、[1]エローラ仏教石窟群とその他の後期仏教石窟群　[2]エローラ初期ヒンドゥー教石窟群と同時代・同地域（北西デカン地方）のヒンドゥー教石窟　[3]エローラ第 16 窟（カイラーサナータ寺院）[4]エローラ・ジャイナ教窟群、ガネーシュ・レーナ窟群　[5]周辺の関連石窟寺院：南デカン地方の初期西チャールキヤ王朝時代の石窟群と周辺のヒンドゥー教寺院群、タミル地方のパッラヴァ王朝・パーンディヤ王朝時代のヒンドゥー教石窟と寺院。以上の区分ごとに年に 3 週間程度の現地調査を遂行する。より大きな枠組みでの石窟美術史構築のため、寺院に付随する造形作例をデータ収集して比較分析を行い、建築形態、図像、様式などから比較基準となりうる要素を抽出し、区分ごとの相対編年を試みる。

４．研究成果

2014 年度はコーンカン地方の CSMVS（旧プリンスオブウェールズ博物館）、カーンヘーリー・カールラー仏教石窟寺院等、デカン地方のアジャンター・アウランガーバード・ナーシク・エローラ後期仏教石窟の一部、パタレーシュワル・ヒンドゥー教石窟寺院（プネー市内）において学術調査を行った。100 以上の窟群で構成されるカーンヘーリー石窟は紀元前 2 世紀から後 10 世紀に至る長期にわたり継続的に開鑿が進められた点で類例を見ない。前期石窟から後期石窟への推移、後期窟の仏教図像・建築形態の展開を一望することで石窟美術史の流れを構想する上で貴重なヴィジョンが提供された。またカーンヘーリー第 3 窟はサータヴァーハナ朝末期の発達した前期チャイティヤ窟で、西インドの窟院で初めての仏像が前庭門柱に刻まれた場であり当研究代表者も以前考察を行ったが（引用文献①）、今回さらに窟内の列柱基台にも仏像が刻まれた痕跡を発見した。またその位置や彫刻面の高さなどを検証しこの仏像が後刻ではなく開窟当初のもの、すなわち前庭門柱の作例とほぼ同時期のサータヴァーハナ時代末期ものと結論づけられた。この発見により、カーンヘーリーにおける仏像の導入方法について新たな解釈の余地が生み出された。ナーシク石窟は前期窟、後期窟両者存するのみならずジャイナ教石窟も含まれており、仏教石窟と他宗教の石窟が共存していた例として、エローラ石窟との比較対象としての重要性が確認された。パタレーシュワル寺院はラーシュトラクータ王朝時代 8 世紀の未完窟で、本

堂にはシヴァリンガが祀られている。広間列柱はほぼ完成されているものの、壁面の神話場面は荒削りの輪郭が確認されるのみで従来主題について言及されることはなかったが、当研究代表者の精査により一面が「アンダカースラヴァダ（象の魔神アンダカを殺すシヴァ）」、もう一面が「マヒシャースラマルディニー（悪魔マヒシャを殺すドゥルガー）であるという確信を得るに至った。その上で窟内を見直すと、シヴァと神妃ドゥルガーが「悪魔の殺戮」というテーマで結びついた興味深いプログラムを有していることが分かる。エローラヒンドゥー教窟のプログラム考察に有益な比較資料が生まれたと言えるだろう。

2015 年度にはスリランカの仏教遺跡調査の機会を得た。スリランカ美術は古代のアヌラーダプラ時代、中世のポロンナールワ時代を通じてインドの同時代美術との関係性が強い。特にアヌラーダプラ時代のシーギリヤ石窟壁画は、様式や技法について常に西インドのアジャンター壁画に比して論じられる。またスリランカの諸時代に遺された磨崖仏も、インド石窟の浮彫彫像と興味深い関連性を有している。従ってスリランカ 調査を加える事でインド石窟研究の視野をさらに広げ、比較対象となる遺跡・作品のデータ収集をより多く収集する事が可能となった。ムンバイ周辺ではジョーゲーシュヴァリ、マンダペーシュワル、パレル（磨崖彫刻）といった初期ヒンドゥー 教石窟を調査し、エローラヒンドゥー教石窟との比較材料を広く収集できた。エローラ仏教石窟では第 1 窟、第 2 窟について、この隣接する 2 窟が一セットのコンプレックスとして構想されたという仮説に基づき精査した。第 2 窟はチャイティヤ窟ではないもののアジャンター後期窟にはないタイプで、房室に乏しいことから単にヴィハーラ窟として位置づけることも難しい。広間の床を高くして基壇を設ける点、左右側壁に仏像を並列する点など注目すべき新たな構想を含む。その開鑿過程を検証することで、側壁の仏像ギャラリーが最終段階で付加されたもので、エローラ初期ヒンドゥー教窟のプランに影響を受けている可能性があり、僧侶の生活空間ではなく儀礼空間として構想されたものと推論するに至った。そこから第 1 窟内が前期ヴィハーラ窟に近い簡素さを呈するのは、第 2 窟のアネックスとしての僧坊として開窟されたとの見解に至った。

2016 年度は前期仏教石窟が造営されたサータヴァーハナ朝の遺跡として重要な中インドのサーンチーのストゥーパ美術を比較材料として調査した。現地の考古博物館所蔵で 20 世紀初頭の発掘以来非公開の第 1 塔南門東柱を特別拝観し写真撮影する機会に恵まれた。そして「サーンチー第一塔南門東柱の仏伝場面－主題・図像・プログラム－」と題する論文で、それまでの報告書では確認し得なかった図相から南門東柱の仏伝場面の主題を新たに比定し、それらの配置に見られる意味を複数の角度から検討した（主な発表論文等、図書 3 参照）。それらの主題配置および図像には、南インドのカナガナハッリ大塔のアーヤカ基壇の作例に通ずる要素が少なからず看取され、サータヴァーハナ朝下の造形的特徴を新たに指摘することができた。また仏伝場面を「主題、図像、プログラム」という 3 つの層から考察するといくアプローチは石窟美術においても有効であろう。同じ手法によりサータヴァーハナ朝時代のカナガナハッリ大塔の仏伝浮彫について、サーンチーの他アマラーヴァティー、ナーガールジュナコンダといったアーンドラ地方の同時代作例と比較しながら考察を行った（主な発表論文等、雑誌論文参照）。カナガナハッリ大塔は発掘が 20 世紀末と新しく、21 世紀に入って研究が進められつつある遺跡で当研究代表者も 2012 年の遺跡公開以来研究を進めているが、デカン高原中部に位置することから他のサータヴァーハナ時代の作例に比してより石窟美術との様式的関連が強く、また多数の銘文が発見されたことから今後サータヴァーハナ時代の編年研究に大きく寄与することになろう。特にサータヴァーハナ王の肖像を遺している点では、ジュンナールのナーネーガート石窟との関連性が問われる。またカラード石窟の肖像浮彫をサータヴァーハナ王と解釈する可能性が強まったことも注目に値する。ムンバイでは CSMVS（旧プリンスオブウェールズ博物館）の館長 、ムンバイアジア協会の研究者、デッカン・カレッジの研究者たちと貴重な情報交換の機会を得られ、CSMVS では将来的に収蔵庫内の作品調査と目録作成に取り組む機会を与えられた。

2017 年度は 2014～2016 年度の不測の悪天候による調査の遅れから、再度デカン高原～コーンカン地方の仏教石窟群の現地調査に取り組んだ。クダー、マハードでは前期石窟に開かれた諸窟に後期石窟の要素がどのように後刻・後補という形で見いだせるか、またマハード唯一の後期仏教窟にどの様な 様式的特徴があるか、という点に注目し資料収集を行った。クダー第 8 窟の特徴的な窟プランと彫像の様式を編年的に考察するためのデータも収集できた。マハード後期窟ではアウランガーバード後期窟との関連性がある事が確認され、古代末期石窟資料の充実化が進められた（後述）。アジャンター石窟群では数十年間施錠され未公開になっている第 8 窟、第 22 窟についてインド考古局との折衝を重ねて調査許可を得ることができ、アジャンター後期石窟群の最初期の様相（第 8 窟）と末期的様相（第 22 窟）の両者を資料として付加することに成功した。第 8 窟は未完成のヴィハーラ窟であるが、前期窟のそれとは異なり、明らかに広間後壁中央から後方に向けて本堂を設けている。これは後期ヴィハーラ窟の最も重要な特徴であるがしかし、本堂内には他のアジャンター後期ヴィハーラ窟のような磨崖の仏像（本尊）が穿たれていない（あるいは痕跡がない）。それはカーンヘーリー、クダー、マハード、ジュンナールといった仏教窟群のうち前期末のヴィハーラ窟で後壁にストゥーパを祀ったり、独立した本尊を祀ったりしたと推測される作例に通ずるもので、ようやく前期ヴィハーラ窟から後期ヴィハーラ窟への過渡期に当たる諸例の情報が揃い、当研究代表者の仮説に説得力を与えることができた（参考文献②）。この成果は今後のアジャンター石窟研究に貴重な情報となるであろう。これに付随し、どのようにデカン地方の前期ヴィハーラ窟に「本堂」というコンセプトがもたらされた

のかという視点で、ジュンナール石窟ガネーシュレーニ第７窟についての試論（ヒンドゥー教祠堂への改変前にストゥーパを祀っていたとする仮説）を’A study of Cave No. 7 in Ganesh Leni Caves of Junnar Cave Temples’と題しプネー大学に提出した（主な発表論文等、図書 2 参照）。また第 22 窟は広間内部に本堂が突出する形態で、アジャンターでは第 20 窟のみに同様の構想が見られるが、これをアウランガーバードで完成される「中心柱窟」構造の萌芽として捉えうるものとして検証を進めることができた。先に触れたマハード第 8 窟も未完成ながら本堂を広間内部に設けようとした構想が認められ、アウランガーバードに準ずる時代様式として注目される。マハード、アウランガーバードの「中心柱窟」構造では本堂の周囲を右繞することが可能となっており、同時代の初期ヒンドゥー教石窟のガルバグリハに影響を受けた結果と考えられる。一方でこのプランが一時期の現象としてそれ以上発展をみず、エローラ仏教石窟に踏襲されなかったこと、アウランガーバードとエレファンタの彫像の様式が極めて類似していることを考え合わせると、そこには石窟造営に携わった共通の工人の流れがありそれがエローラ仏教窟では共有されなかったという推測が導き出される。それは今後のエローラ石窟史研究の一視座を提供することになろう。ピタルコーラー石窟ではアジャンター後期窟にやや遅れる壁画資料を比較研究のため収集した。エローラヒンドゥー教石窟に断片的に遺された壁画との様式比較にも役立てられるであろう。またアウランガーバード仏教石窟に照らしてエローラ第 17～21 窟を精査することで、これらの様式的なつながりをより明確に看取しうることができ、編年論への新たな情報を獲得することができた。

2019 年度（2018 年に研究が中断され延長申請を行った）には同時代の西インド石窟との比較研究に処するため情報収集の地域を大きく広げた。北インドではアッラーハーバード州立博物館やグワリオール考古博物館といった中・北インドの古代末期～中世ヒンドゥー教美術の収蔵品が豊富な博物館の調査・資料収集を進めた。西インドではグジャラート州のジュナガド石窟群（バーバピヤーラ、ウパルコット、マヒガデチ窟を含む）、カンバリダ石窟、この地方特有の階段井戸（パタン、アダラージ、ダーダ・ハリなど）などを調査した。デカン地方とグジャラート州の石窟は発達過程を異にするものの、列柱・入口装飾の型式や装飾モチーフに密接なつながりを示しており、陸路ではなくアラビア海沿岸交易により海路により情報が伝達された可能性を検討する必要性を認識した。南インドではパッラヴァ朝、初期チョーラ朝の建造物が多く残るタミールナドゥ州プドゥコーッタイ、ティルチラーパッリ地区のヒンドゥー教石窟、前期石窟期の壁画が残るシッタンナヴァーシャルジャイナ教石窟など、同州北部ではカーンチープラム、マーマッラプラムの石造建造物（石積寺院、岩石寺院、石窟寺院含む）、バンガロール州立博物館、チェンナイ州立博物館、ポンティチェリー博物館も調査に含めた。初期チョーラ諸寺院では予想以上に壁画が散見され、同時代デカン石窟との様式比較に貴重な資料を得ることができた。

デカン地方ではエローラ・ジャイナ教石窟寺院グループの一部を調査した（一部はインド考古局の修復作業中で保留）。そしてエローラ仏教・ヒンドゥー教窟に比して時代が下ると見られるジャイナ諸窟（9-10 世紀頃）が前者と異なる空間把握をしており、装飾モチーフにも大きな変化が見られることを確認した。その変化の軌跡をより丹念に抽出することで今後編年作業における基準を提示しうるであろう。ガトートカッチャ石窟寺院は周辺の道と階段が最近になって整備され 1984 年の調査以来の再訪が適い、前回多数の蝙蝠に阻まれ進入できなかった本堂内部の特徴を把握し得た。ガトートカッチャ石窟の制作過程について当研究代表者は以前論文を発表し、アジャンター後期窟の初期～末期の様相が開鑿の過程で漸次確認されることを入口装飾や列柱の表現形式の変化によって示した（参考文献③、本尊については触れていない）。今回、本尊である説法印仏坐像の台座を確認したところ二鹿法輪を中心に二層を成して礼拝者の群像表現が施されていることが分かった。法輪左手の 6 体のうち３体は比丘像である事が確認されるが、右手の６体は髪を伸ばした俗人である。これらの群像は本尊台座から大きく前方に突出しておりいずれも四分の三側面から形象を捉え奥行き表現を伴っている。アジャンターの本尊基壇にはこれほどまでに量塊感を伴う例はない。いわばアウランガーバード第３窟本堂内供養者群像の縮図とも言うべき表現で、ガトートカッチャ石窟開窟の終わり頃に彫刻技法が新たなレベルに達したことの証左となる。当窟は単にアジャンター後期窟の発達過程を開窟過程に平行して示すのみならず、アウランガーバードへの移行過程をも内包する点でその重要性が再認識された。

なお後期石窟の仏教尊像についての知見になるが、5 世紀末～6 世紀初頭のアジャンターでは密教以前の大乗仏教で説かれる仏陀像が中心で、第 26 窟には仏伝場面の涅槃・降魔成道も大きく取り上げられている。しかしこのアジャンターで最も遅い時期に造営された第 26 窟には、二カ所で三尊形式の脇侍としてターラー、すなわち密教系の女尊が確認される。それらは後陣の奥壁や前庭房室付近に小さく表現されており、主要な建築装飾というより後刻に当たる類いであるが、それでも 7 世紀と見られるアウランガーバード第 7 窟でターラーの存在と役割が重要視されている状況から見て、アジャンター第 26 窟にその兆候が確認されることは非常に重要である。さらにエローラでは密教系尊像の種類が大幅に増加している点が重要で、金剛界大日如来も発見され（参考文献④）、胎蔵界曼荼羅のルーツをエローラに求める視点も注目される（⑤）。今回の調査で当研究代表者が気づいたのは第 12 窟の仏陀像の多くに菩提樹が表現される点である。第 10 窟本尊と第 12 窟広間過去七仏成道に付随する菩提樹については従来から認識されていたことであるが、第 12 窟では本堂の仏陀像頭部上方、第 3 層周壁に並ぶ仏陀像頭部上方の壁面にも壁画で菩提樹の枝葉が表されている。特に本堂のそれは下地の漆喰を葉の形に盛り上げて浮

彫のように仕上げている。これらは彩色の大半が劣化して黒色に変化したり大半が剥落していたりで従来見落とされていたが、今回の精査で明らかになったことである。これらの仏陀像は必ずしも触地印を結んではおらず成道の場面と説話的に結びついているわけではない。第 10 窟（ヴィシュヴァカルマ窟）はインド石窟史で最後に造営されたチャイティヤ窟であるが、ストゥーパの表現がアジャンター第 19，26 窟よりさらに変化し、覆鉢が後退し前面の「説法」仏倚坐像の存在が強調されている。そして仏龕の上方に尊像頭部を覆うように菩提樹が浮彫にされる点はアジャンターでは見られない表現でありながら従来積極的な解釈はなされなかった。第 10 窟以外にも菩提樹を伴う仏陀表現が増加したことは、エローラに触地印仏が少なからず見られることとも関係するであろうし、エローラにおける仏教思想の変化と大きく関わる問題として注目され、今後の研究に活かされるべき情報となろう。

最終年度には南インドの調査中、ポンディシェリーのフランス極東学院とアメリカインド学研究所、チェンナイ大学のサンスクリット研究所などで研究者と情報交換を行った。デリーの研究者とは日本仏教美術におけるインド・ヒンドゥー教美術の受容についての本を出版し（主な発表論文等、図書 1 参照）、2020 年 3 月に同テーマに関する国際セミナーを「日本におけるインド・ヒンドゥー教文化の受容」として幅を広げ、インド国際センターにおけて共同開催する事を企画、8 名の日本人研究者を組織してセミナーの準備を行った（基調講演と第 3 部の議長を担当する予定であったが現在、新型コロナウィルスによる渡航禁止令のため延期されている）。 また 5 年に渡り調査・資料収集を行った仏教石窟寺院については上述のように様式変遷および編年研究再構築の為の手がかりを多く得る事ができた。それらの知見およびデータ公開については、『インド美術資料集成・石窟編』（国書刊行会）として出版を企画中である。

＜引用文献＞

①平岡三保子「カーンヘーリー第３窟の初期仏陀像造例について」『密教図像』第 24 号　2006 年、1-15 頁
②平岡三保子『インド仏教石窟寺院の成立と展開』山喜房佛書林、2009 年（日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」による）
③平岡三保子「ガトートカチャ石窟寺院についての考察」毎日新聞社『佛教藝術』第１７７号、昭和 63 年、75-99 頁。
④朴享國「エローラ石窟第十一・十二窟について」『佛教藝術』233 号、1997 年。
⑤定金計次「インド後期仏教石窟と中期密教－退蔵曼荼羅と『大日経の成立』－」中国美術研究会，2017 年　研究発表レジメ、「インドにおける胎蔵曼荼羅の成立過程に関する研究」科研費研究成果報告書（研究代表者定金計次）2013-2014 年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 平岡三保子	４．巻 100
２．論文標題 聖遺物をめぐる仏伝図～カナガナハッリ仏塔の作例を中心に～	５．発行年 2018年
３．雑誌名 南都仏教	６．最初と最後の頁 25/49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 平岡三保子
２．発表標題 「カナガナハッリ仏塔の仏伝表現―アーヤカ柱基台の作例について―」
３．学会等名 2015年度第3回 中央アジア科研研究会：科研（基盤（B））「中央アジア仏教美術の研究―釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に―」（代表：宮治昭）
４．発表年 2015年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Benoy Behl and Mihoko HIRAOKA	４．発行年 2019年
２．出版社 Benoy K Behl Films	５．総ページ数 212
３．書名 Hindu Deities Worshipped in Japan	

１．著者名 Mihoko HIraoka and others	４．発行年 2019年
２．出版社 Samvidya Institute of Cultural Studies, Pune	５．総ページ数 376
３．書名 "Pratnaratnam" Essays in Honour of Dr. Arvind Prabhakar Jamkhedkar	

１．著者名 平岡三保子他	４．発行年 2020年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 635
３．書名 アジア仏教美術論集　南アジアⅠ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考